

教育系大学院生による社会科“森林”の教材研究—1枚の写真を通して

## 守り受け継ぐ古都京都の森

作成：今河慶昭・牛之浜紀子・川面なほ・西田正明・渡辺育代(京都教育大学大学院1回生)

寸評：山下宏文(京都教育大学 教授)

平成16年度後期の大学院の演習で「森林」に関する教材研究に取り組んだ。演習は、まず日本の森林・林業の現状と社会科における森林の扱い方の講義および森林に関する書物の講読、その後、京都東山(高台寺山)国有林および北山林業地を実地見学、そして、教材を作成するという手順で行った。〔山下〕

### 森林を中から見るか、外から見るか—小学校第5学年「森林資源の働き」(写真①)

語り：「京都の高台寺や清水寺の背後に森林があります。この森林の中に入ってみると、シイなどの常緑で背の高い木がたくさんあることに気づきます。シイがたくさん育つと、地面に光が入らないため、ほかの種類の木が育ちにくくなります。昔の人々にとって山の木は、生活を支えるための資源の宝庫のような存在でした。人々が木を利用していたため、現在のようにシイが大きくなりすぎるということはありませんでした。現在、シイが増えすぎたこの山の木の種類を多様にしようとしています。地元の人々やお寺の人々の希望を取り入れて、新しい景観をつくり出そうとしているのです。いつも見ている森林を中から見たり外から見たりすることで、新しい発見があるはずです。」

意図：昔の人々は、山の木を生産資源として利用していました。生活環境の変化に伴い、現在では山の木を生産資源としてだけでなく、環境資源としても価値を見いだそうとしています。人々の森林へのかかわりが、生活に直接利用するものというだけでなく、風景として見て楽しむというものにもなっています。〔川面〕

### 景観としての森林—中学校社会科地理的分野「資源や産業から見た日本の地域的特色」(写真①)

語り：「京都市内の森林の多くは世界文化遺産に指定された寺社のそばにあり、現在の古都京都の景観を形づくる重要な要素となっています。特に東山国有林は市街地の近くにあり、京都市内から見渡すことのできる主な森林です。この風光明媚(めいび)な東山の森林は明治時代の初期から造林が行われ、長年の育成の結果、現在の緑豊かな姿になったものです。

しかし、近年ではシイの侵入や松枯れなど、かつての京都の森林の景観が損なわれつつあります。古都京都にふさわしい景観となるよう、人々が京都の森づくりに取り組んでいく必要があります。」

意図：京都は周りを山に囲まれた都市である。そのため、市内からどこを見渡しても必ず森林が目に入る。これは今も昔も変わらない。その森林を、古都京都の景観として誇れるものにしていくためには、人々がより森林への関心を深め、かかわっていく必要がある。

〔今河〕

▶写真①  
清水寺と背後の森林



写真提供…京都大阪森林管理事務所

### 世界文化遺産貢献の森林—高等学校現代社会「現代に生きる私たちの課題」(写真①)

語り：「ここに写っている森林はどこにあるかわかりますか。これは清水寺の背後にある森林です。京都では清水寺を含む多くの国宝建造物や特別名勝庭園があり、これら寺社および城17件が、「木造文化財建築物群」として平成6年12月に世界文化遺産に登録されています。これら歴史的木造建築物を後世に伝え、周辺の風致景観の保護や修復資材の供給を目的として「世界文化遺産貢献の森林」が設定されています。この写真に写っている森林が高台寺山国有林として、これにあたります。京都では、京都市街地を囲む貴船山、鞍馬山、東山連峰、嵐山等に設定され、京都のほかでは、奈良と宮島(広島)に設定されています。」

意図：私たちの住む京都は、日本を代表する国際文化観光都市である。1200年にわたり受け継がれてきた文化と歴史を守り、さらに発展させていかなければならない。「世界文化遺産貢献の森林」を通して、観光資源でもある景観を守ることだけでなく、環境を守るための努力や、人間と自然の関係を考えるきっかけになることを期待する。〔西田〕



▲写真② 京都東山の林内

屋根になる木—小学校中学年「地域に残る文化財」  
(写真③)

語り：「この写真は、ヒノキの写真です。幹をよく見て下さい。周りのヒノキと比べて幹が違う色をしているものがあります。どうしてでしょうか。それは檜皮（ひわだ）と呼ばれるヒノキの皮を採った跡だからです。では、いったい檜皮は何に使われているのでしょうか？ 檜皮は昔から伝わる屋根をふく技「檜皮葺（ぶ）き」の材料として使われています。神社やお寺の屋根で使われています。檜皮葺きの屋根は、日本中でおおよそ2,000棟近くあります。京都市内では、清水寺や北野天満宮をはじめ、多くのお寺や神社の屋根で見られます。

皆さんも、これから京都市内のお寺や神社に行ったら、屋根に注目してみましょう。そして檜皮葺きを見つけたら、このヒノキの木を思い出してみてください。」

意図：この学習を通して、日本の伝統的な屋根の葺き方の一つに、木の皮を使ったものがあることを知り、木が私たちのふだん気がつかないところでも利用されているということを学んでほしい。そして、林業と日本の伝統工芸とのかかわりや、地域の伝統工芸や芸能を学ぶきっかけとなることを期待したい。〔渡辺〕

シイの有効利用—高等学校日本史B「地域社会の歴史と文化」(写真②)

語り：「ここに写っている幼木は何という木かわかりますか。これはシイといって主に本州中部から四国、九州に生育し、朝鮮半島にも分布しています。この写真は、京都市の東山の山中で撮られた写真です。とても生命力の強い木で、マツなど、ほかに生育している木々を圧倒してしまいます。また、シイの性質は、やや重硬で狂いが生じやすく、加工にはあまり適していません。

戦前は、人々がシイを有効に活用し自然と人々が共生していましたが、エネルギー革命が起こってからは、活用することがなくなり、各地に大木が残っています。シイの有効利用についてみんなで考えながら、あらゆる木々が共生できるようにしたいものです。」

意図：京都市東山の木々は戦前には人々が有効に利用していたが、高度経済成長の過渡期にエネルギー革命が起こってからは、活用することがなくなった。戦後、風致保安林に指定されてからは、シイの木がほかの木々を圧倒するようになり、あらゆる木が共存していくことが課題となっている。シイの性質を知ること、新しい用途を考えていく必要があるのではないだろうか。〔牛之浜〕



▲写真③ 樹皮を採取されたヒノキ

○寸評〔山下〕：京都東山は古都京都の景観を構成する重要な要素であるが、その多くが国有林であることを知る者は少ない。東山国有林は、世界文化遺産に指定された社寺の背景としてふさわしい森林にするための管理が求められている。そのため、いくつかの地区ごとにその方針を定め、回復・保全を図っているが、その一つの高台寺山国有林は、シイ類と落葉広葉樹の混交した森林景観を保全しようとしている。また、風致の保全だけでなく、「世界文化遺産貢献の森林」として、「檜皮葺採取対象林」なども設けている。国民の財産としての国有林を、これからどのように守り育てていけばよいのかを考えていくための手がかりとして、これらの教材は有効であると思う。

なお、実地見学に対しては、箕面森林環境保全ふれあいセンターの積正治自然再生指導官および京都大阪森林管理事務所東山森林事務所の山田千尋森林官に案内・説明をしていただいた。

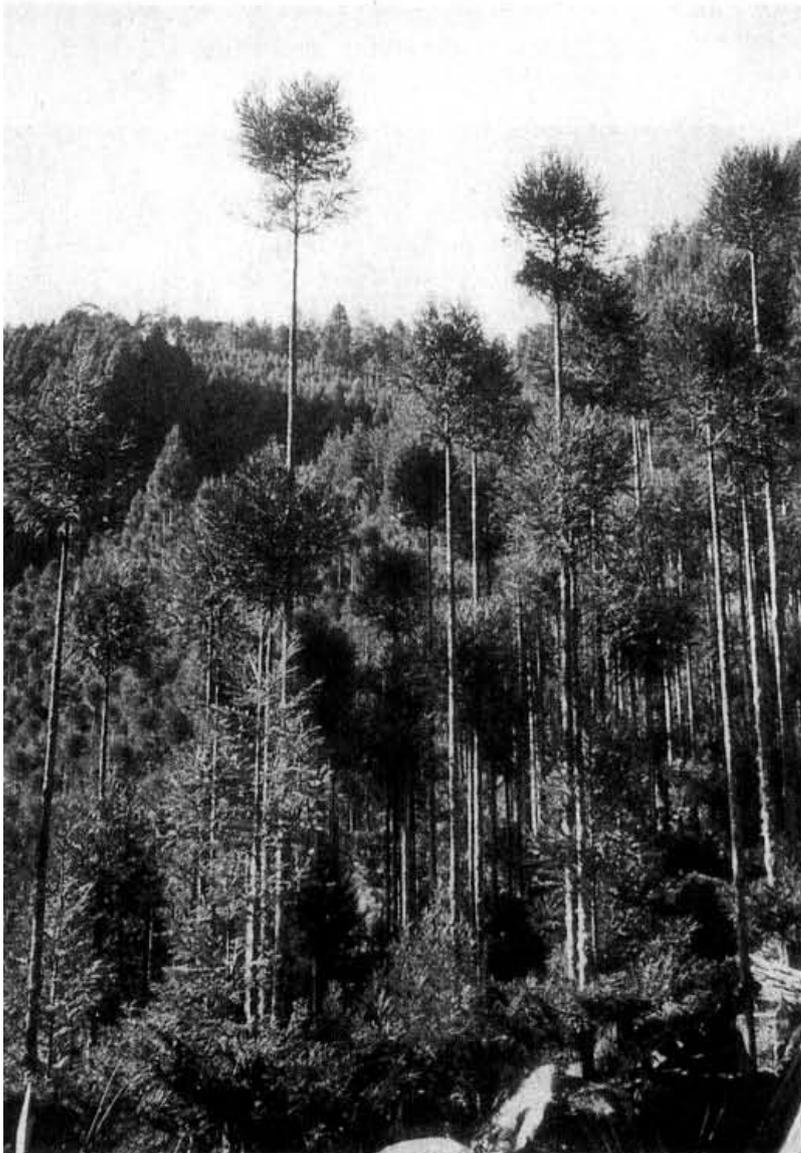
## 伝統文化を支える人々—高等学校現代社会「現代に生きる私たちの課題」(写真④)

語り：「この写真は、京都市街の北西約20kmに位置する京都市北区中川で、磨丸太用の北山スギを生産している様子を写したものです。この磨丸太生産の発祥は古く、室町時代の初めごろといわれています。中川地域の磨丸太は茶室や数寄屋の建築用材として用いられ、その代表が桂離宮や修学院離宮です。この北山スギは、昭和41年に京都府の木として制定されました。また、製品の磨丸太は、京都府伝統工芸品に指定されています。」

意図：伝統文化を支える人々の働きを北山スギの生産現場で見学した。伝統文化を支えるために、北山スギが製品として出荷されるまでに長い歳月と多くの工程が必要であり、伝統を受け継ぐ人々が丹精込めて磨丸太をつくるまでの努力と苦勞を理解することを、期待する。〔西田〕



◀写真④ 北山スギ



▲写真⑤ 台スギ

## 細いスギは何のため？—小学校第5学年「森林資源の働き」(写真⑤)

語り：「この写真に写っている木は何でしょうか。答えは京都市の北山でつくられているスギです。このスギの幹は細くて長いですね。」

太い幹を切ってしまう、株から出たとり木の芽を選んで成長させていくと、このような細く長い幹になります。こうしてできた丸太は、茶室などの屋根のひさしを支える「タルキ」になります。北山では、このような細い丸太だけでなく、床の間の柱になるような丸太も育てています。

林業をしている人たちは、木の使われ方によって、育て方を工夫しているのですね。」

意図：この学習を通して、京都市の北山で行われている林業では、材木の用途に応じた育て方を工夫していることを学んでほしい。また、森林資源を育てることの重要性について考えるきっかけとなることを期待する。〔渡辺〕

## 伝統的な技術はどこから生まれる？—小学校中学年「特色ある地域の人々の生活」(写真⑤)

語り：「大きな切り株から細い木がまっすぐ生えています。これは、台スギのタルキ仕立てと呼ばれています。この木は、お茶室などをつくるための材料として利用されています。」

タルキがつくられているこの地域の山は、それほど豊かな土地ではありませんでした。そこで、人々は昔から、床の間に使われる丸太をつくるだけでなく、1本の木から何度も収穫できる細くて長いタルキをつくってきました。また、タルキが使われる京都や大阪の町が近くにあったため、このタルキをつくる技術が大きく発展しました。」

意図：北山スギの特殊な施業技術は、肥よくではない土地、北山スギの消費地（京都や大阪）が近くにあったということから生まれた。北山スギやそれを支える伝統的な技術が、自然的条件・地理的条件・人々の努力や工夫が相互に関係しながら生まれたということに気づくことを期待する。

〔川面〕

**磨き上げ作業がもたらす北山スギの美しさ—高等学校地理「現代世界の地誌的考察」(写真⑥)**

**語り**：「この写真は、北山スギを出荷する前に  
行方磨き上げという作業の様子です。伐採された  
原木はしばらく葉がついたまま放置して乾燥させ、  
加工場へ運びます。ヘラや水圧機械などで木の皮  
を取り除いたあと、女性たちの手によって磨かれ、  
丸太についている渋皮や汚れを落とし、ツヤ出し  
を行います。こうして美しい木肌を持つ北山磨丸  
太に仕上げます。この作業は主に冬に行われ、北  
山スギの1本1本を丁寧に磨砂で磨き上げます。」

現在では、写真のように女性の手作業によって  
磨かれることは少なくなってしまったのですが、  
この磨き上げ作業によって北山スギは、室町時代  
から北山磨丸太の名で知られるようになりました。  
この磨き丸太は、高級建築材として床柱などに用  
いられています。」

**意図**：造林、搬出を経て、最後の工程である加  
工の際に、女性たちの手によって磨き上げられる。  
この作業により、北山スギをより美しいものへと  
していく。この磨き上げ作業から「磨丸太」と呼  
ばれている。北山スギが昔から続く京都の文化を  
支えてきたことを理解させたい。〔牛之浜〕

**誇れるブランド・北山スギ—中学校社会科地理  
的分野「資源や産業から見た日本の地域的特色」  
(写真⑦)**

**語り**：「北山林業地は京都市北区中川を中心  
とする約4,300haの地域にあります。ここは、  
床の間の柱などに使われるスギ磨丸太の生産を  
行っている林業地です。皆さんの家には床の間  
はありますか？ 最近、床の間のある家が少  
なくなっていて、北山のスギ磨丸太も利用され  
なくなっています。」

写真をよく見ると、木の表面に柔らかな凹凸  
があります。これは絞（しぼ）といって、北山  
の人々の技術によってつくられたものです。北  
山林業に携わる人々は、こうして北山独自のブ  
ランド製品をつくり上げてきたのです。」

**意図**：北山林業地を訪れると、伝統的な技術・  
文化を体全体で感じるができる。これらは、  
今日までのたゆまざる英知と努力によって築か  
れてきたものである。われわれは、長い歴史と  
伝統産業の芸術とも呼べる技術を継承し、発展  
させていく必要があることをとらえさせたい。

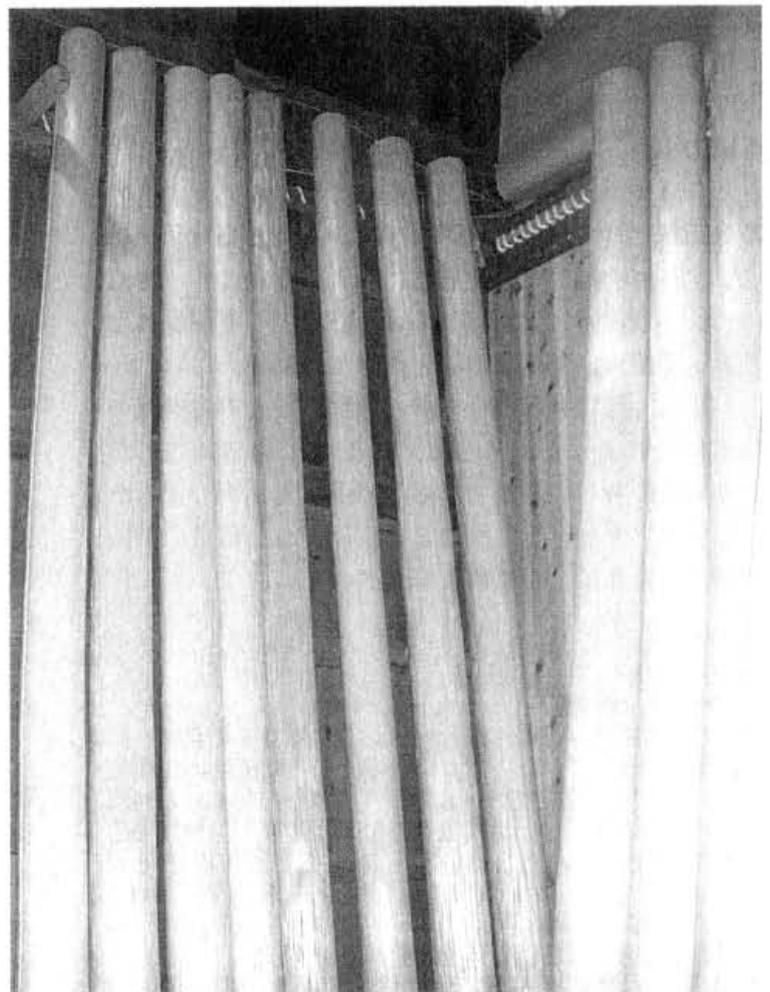
〔今河〕

○寸評〔山下〕：京都北山林業地で生産される北山スギは、長い歴史の中で高度な技術を発展・継承させてきた。北山林業は古都京都の文化、さらには、日本の森林文化を支える重要な役割をも果たしてきたのである。林業には、日本の文化・伝統が凝集されている。北山スギが持つ、産業としての林業という本質に、文化・伝統という要素を融合させた教材化が、社会科において求められるのではないだろうか。

なお、実地見学については、京都府農林水産部林務課の志方隆司林業専門技術員に計画および同行していただいた。また、現地では、全行程を中田 治氏に案内・説明していただいた。中田氏の北山林業の継承・発展に対する熱意と情熱には、参加者全員が心動かされるものを感じた。中田氏の「生きざま」そのものが、社会科における最高の教材であることを確認しておきたい。



▲写真⑥ 磨き上げ作業



◀写真⑦ 磨き丸太